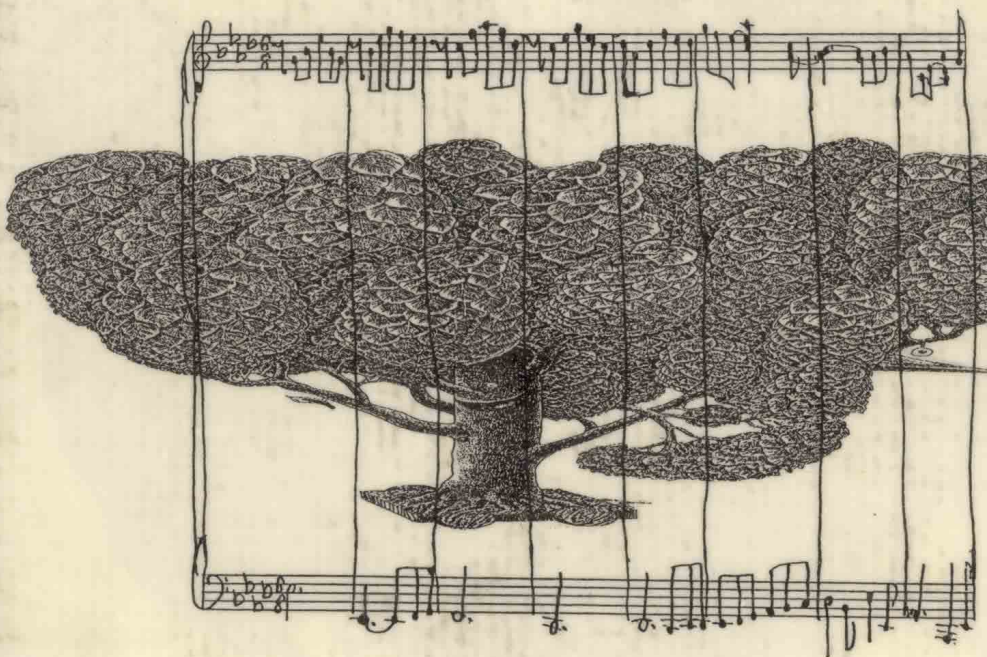


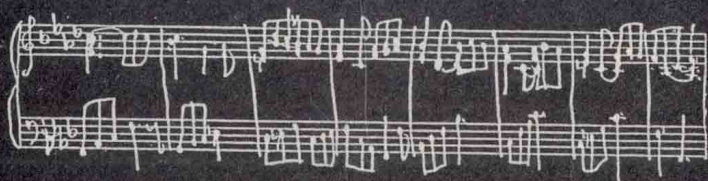
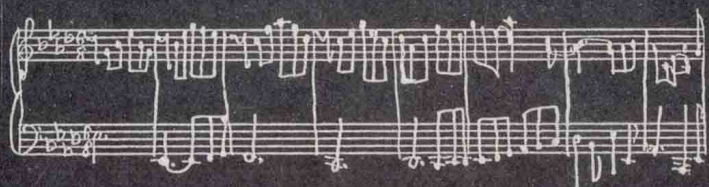
人生の親戚



大江健三郎

新潮社

人生の親戚



大江健三郎

ISBN4-10-303612-5 C0093
© Kenzaburō Ōe 1989, Printed in Japan

人生の親戚
じんせい しんせき

一九八九年 四月二十五日 発行
一九八九年 六月三〇日 四刷

著者 おうえけんざう 大江健三郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部 (03) 二六六—五一—
編集部 (03) 二六六—五四—

郵便番号 一六二

振替東京四—八〇八

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛
お送り下さい。送料小社負担にてお取替えい
たします。

人生の親戚

装帧·司修

一章

3

年少の友達から「――愛する女のように、未来を愛する人たちがいた、というアイルランドの詩人の一節を読みました」と、手紙に書いてきた。「ここでは未来を愛する人たちが主題で、それを意味づけるために、愛する女のようにという比喩があるのでしよう。しかし、これを読んだ僕には、愛する女と未来を愛する人たちが、一緒に、数寄屋橋公園に張ったテントで立ち働いている光景が浮んだのです。若者らは三人、女はひとりですが、誰も彼女を独占することなどは思わないで、愛慕しているというか敬愛しているというか、そうした状態にあり、彼女を愛することにかさねて、三人の若者が自分らの未来を愛している……　そういう気持でいた、と懐かしい心で思ったのです。現在の僕らの映画の仕事でいえば、まず美しい女を画面にとらえ、つづいて年上の彼女に明るい愛を感じている三人の若者たちをとらえることになるでしょう。かれらは

微笑しながら立ち働いている。その微笑は、美しい女と一緒に仕事をしていることから、自然に浮んでくるのですが、胸のうちに愛する未来への思いがあるために、いつまでも潤れない。そのようにシーンとしてあらわせば、正確なところを表現することになる、という気がします。あの頃はじめて仲間となったわれわれが、その後、朝雄君を中心にして、これまで撮ってきた作品のどれにも、あのテント脇の彼女に蝶のようにについてまわるようだった目の光、ぬくもりが基調をなしていたように思います。今度の仕事もそのようなものにしたいとねがいます。主題も状況もきびしいとしても。』

手紙は、先だつてメキシコのグワダハラから来たものだが、差出人の、録音担当の広一君には、当の女性をめぐつてかれらの映画チームへ僕が書く物語のために、自分としての主題をサジェストしたい、という思いがあるのだろう。

それに加えて、物語のタイトルを、かれとしては「愛する女のように」としたのであるらしい。もともとはテレビ用のビデオ作品の作り手であるかれらが、はじめて映画フィルムで作る、この企画の進め手は、また別のタイトルを示している。それに僕としても、最後にその話になるはずだが、ここでタイトルについてはまだ留保することをいつておきたい。「愛する女のように」、それは確かに悪くない。しかし僕が当の女性のことを「愛する女のように」思い描く、ということはない。しかしなまなかの「愛する女のように」という段階を越えて、彼女が僕のうちに根をおろしていることも確かだから、事態は複雑だ。正直に言えば、それはおおいに燃える

根のようでもある……

この女性、倉木まり恵さんの生涯を映画に作る、そのもともとの物語を、メキシコから来日して僕に依頼したセルジオ・松野氏は、さらに堂どうとしたタイトルを提案したのだった。まったく堂どうとしたものだ、それは「世界最終の女」というのだから！

セルジオ・松野氏が来日しての、話合いの内容は、この物語の終り近くに書く。それでもこの突飛なタイトルにいたる、かれの構想の切実さについては、あらかじめ示しておこうと思う。

倉木まり恵さんは、生涯の最後を、数年間にすぎぬのではあるが、メキシコの田舎で農場の経営に参加し、そこで働くインディオや混血^{メスライ}の人びとの衛生管理に力をつくした。そのうちまり恵さんは、農場の開かれた、アズテックの遺跡のピラミッドが高い山巔から見おろしている村でのみならず、農場が貧しい働き手をすくいあげた、周辺のいくつもの村でも、聖女のように崇められた。もとより、メキシコまで確かめに行ったのではない僕としては、農場の責任者であるセルジオ・松野氏の話をそのまま生かしてここには書くのである。広一君、朝雄君らの映画チームが現地入りしているわけだが、すくなくとも松野氏の話の信憑性を疑う、という情報はよこしていない。

セルジオ・松野氏はまり恵さんの映画を、農場で、またその周辺の町や村で広場^{ソカロ}に幕を張って上映する、という構想なのだ。それも祭のような機会ごと、繰りかえし上映するだろう。はじめは黒沢明の作品を中心に、日本映画のフィルムを買って行って併映する。しかしまり恵さんの映

画は、他の作品にかえがたい上映の柱となってゆくだろう。

僕の家で、セルジオ・松野氏はセンチメンタルな酔い方をし、その上で夢想するようにこう話した。日本に来て思うことは、アメリカでもそれを感じはするが、さらに、世界が減びに近づいているということだ。メキシコでわれわれ貧しい者らが努力しても、この勢いは押し戻せない。世界に終りが近づく時、まり恵さんが愛した農場と村の人びとは、頂上にアズテックのピラミッドを持つ、切りたった山腹へ向けて野外の幕を張り、わずかな平地からすぐつらなる礫砂漠を背にして、まり恵さんの映画を見つめながら、最後の日々をすごすことになる。風にバタバタ鳴る幕の上に映写されるまり恵さんのクローズ・アップは、それらの人びとにとって「世界最終の女」の面影である。映画のドラマ部分は、まり恵さん役に女優を起用するはずだが、最後のシーンは本物のまり恵さんの写真を、静止したスチールとしてうつし出しつづけたい……

セルジオ・松野氏がこの話をしたのは、かれが来日してまり恵さんの病状をつたえ、僕と朝雄君らに映画への協力をもとめた際のことだ。話柄の深刻さと矛盾せぬ、セルジオ・松野氏の酔ったの大風呂敷に、つい微笑もしたもの、話は胸にきざまれた。以前しばらくメキシコ・シテイーで暮した折、大きい高度差のある山を昇り、谷間へ限りなく下降する長い道のりをへて訪れた、やはりアズテックのピラミッドが山頂にあるマリナルコの村を僕は思っていた。

その夜は、ねじくれ曲った柳に黒く乾いたトカゲが走りのぼる、広大な原っぱに幕を張り、日本人女性のスチール写真を見あげているメキシコ人たちの夢を見た。マリナルコでは、ピラミッ

ドの山から谷間へかけて、およそメキシコの森林相のありとあらゆるかたちが、幅の狭い横のベルトをなしていた。あれらを背景に、人びとがみな死にたえようとしている世界の、さらにも生命の気配のない礫砂漠の前に、衰弱した四十代なかばの日本人女性がうつっている。山嶺の向うから陽が昇るとスクリーンは真白になるが、時がたち礫砂漠の向うに陽が落ちれば、スチール写真はまだくつきりとあらわれて来る。もう誰もフィルムのリールを巻き戻すことはせず、最後のシーンをうつしつづけたままだ……

広一君が手紙に書いていた、数寄屋橋公園で立ち働くまり恵さんの様子ならば、僕にもはつきりした記憶がある。自分がテントのなかに坐っていたこともあり、くつきりと明るい光を全身にあびて、度の強すぎる眼鏡で見る像のようなイメージとして。髪が生えざわまで丸みをおびていない、広い額が、しっかりと鼻梁とよくつりあって、知的でかつアツケラカンとした笑顔のまり恵さんが、右から左へスーッと移動する。それを真横から眺めているイメージが、輪郭から色合まであくまでも鮮明なのは、彼女がさかんな光のなかにあり、こちらは薄暗いなかに坐っているからだ。

なにか力仕事をしようとする彼女を、すぐ傍で見まもる位置にしながら、こちらには立っていつて手伝う気持がなく、ただスーッと動いて行く姿を眺めている。僕はテントのなかでハンガー・ストライキをやっている最中で、まり恵さんは支援のヴォランティアーとして来ているのだ。さらにこの記憶のシーンに注意をこらすと、テント入口の空間を微笑して横切ったまり恵さんに、

三人の若者が、光に笑顔をさらして従って行く……

もう十年ほども前のことになる。寄せ集めの仲間とともに、僕はハンガー・ストライキのテナントのなかにいた。憐れな不精鬚を伸ばして坐りつづけていたわけだ。瘦せた街路樹が、テナントの入口からのぞく明るい外気に、それなりの青葉を揺すっていた六月……

韓国の若い詩人が「反共法違反」のかどで投獄され、さらには死刑判決を受けた。そこで当の詩人の社会的活動に関心を持ち、直接連絡を保つてきた知識人グループを中心に、韓国政府に抗議するハンガー・ストライキが計画されたのだ。テナントには朝鮮問題の専門家をはじめとして、社会思想史の学者やアジア全般の人権運動と関係して来た平和運動家、そして在日韓国人の作家や詩人たちがいた。

そこに加わった僕は、なによりこの詩人の文学的な実質に強く動かされていた。そしてそのような気持の方向づけは、テナントのなかで微妙に周りとズレてもいた。並んで坐っている在日韓国人の作家李さんと、われわれが成果の疑わしい支援行動をしている詩人の仕事について話することはできただろう。ほかならぬかれの翻訳をつうじて、僕は当の詩人に接したのだから。しかしかれがテナントの仲間と熱心に語りあっていたのは、政治的なメッセージと行動の評価ということだ。僕が当時中心的な読書の課題としていた、ロシアの芸術理論家バフチンと、この詩人のイメージ・システムの対比というような主題は、口に出しにくい雰囲気であったのである。

われわれ年長の者らがハンガー・ストライキを続けているテナントの前で、詩人を支援する署名

と募金の呼びかけを若い活動家が行なっていた。かれらの配っているビラには、いわゆる新左翼のアジア問題研究家の文章が載っていた。それには、どうして日本にはこの詩人のごとき真の文学者がいないか、と怒りつつ嘆くことに始めて、韓国の民主化運動の現状が分析されているのだ。テントに聞えて来る活動家の街頭演説は、——詩人が詩を書くことで、なぜ死刑にならないければならないか？ と繰り返して聞いた。それはそのとおり。そのようなことをもくろむ独裁政権に抗議するアッピールのために、僕もハンガー・ストライキに加わったものではあったけれども、若い活動家たちがあまりに確信をこめてこの文句を繰り返すのを聞いてみると、——しかし、詩人が詩を書くよりほかのことで、死刑になるよりは筋が通っているのじゃないか？ という思いも湧くことがあったのだ……

こういう政治的雰囲気の中かで、時どきテントのなかを覗き込んで気を配り、それよりほかはテントの外周りで効率よく立ち働いているまり恵さんの存在は、いかにも個人的な親密さの励ましをつたえてくれるものだった。彼女のアツケラカンと陽気で、よく勉強する女学生の生真面目さもある顔が、きびきびと肩から頸を動かす仕方ではテントの入口から突き出され、こちらに向けて、ある表情をする。そういう時、僕はむしろ彼女にしたがって骨おしみせず働いている、朝雄君たちの仲間になったような気がした。年上の美しい縁戚の女性に、まだ学生の年齢の自分が大切にされているというような、甘美な追想に似たものをあじわったりもしたのだ。

もちろんまり恵さんは僕より年下で、当時、三十六、七歳であつただろう。あの頃のまり恵さ

んを思うと、すぐ浮んでくる言葉として、アツケラカンと、とすでに繰りかえし書いた。しかし彼女の家庭には、おもに彼女が担わねばならぬ大きい苦しみがあったのであり、そのものたらずものは、生真面目な印象を掃るがぬものとする、まっすぐな眉の下、睫毛の濃さから翳っているようでもある眼に、読みとることができた。もともと彼女の勢いのある眸の動かし方は、行きずりの人間にそうした観察の機会をあたえはしなかったはずだが……ハンガー・ストライキのテントの周辺で、彼女は女性らしい自然な華やぎのある働き手であり、しかも口数は少ない人と、他のヴォランティアーたちに受けとめられているようだった。

僕がまり恵さんの家庭の困難ということを知っていたのは、むしろそれが直接の機縁となつて、彼女と知り合つたのであるからだ。まり恵さんにしても、韓国の民主化運動とそれを先導する詩人に、とくに関心をよせていたはずはなく、やはり困難をかかえて家から出られない僕の事情を考慮して、手だすけに来てくれていたのである。

当時、僕の長男は三軒茶屋の近くの、青鳥養護学校という障害児施設の高等部にいた。まり恵さんの長男が中等部に入つて来た時、障害の性格が似ていることと、ともにクラシック音楽が好きであることを見た教師の発案で、ふたりはとくに紹介され、友達になった。つまりはかれらの母親同士も、親しくなったわけなのだった。ある時、ドイツのオルガン奏者が指揮する、バッハの『ヨハネ受難曲』演奏会に、予定していた妻が行けなくなり、養護学校の母親の組織をつうじて買つておいた切符で、僕が息子と出かけた。やはり長男を連れて来ていたまり恵さんに、そこ

で初めて会ったのである。

薄暗く狭いロビーの雑踏で顔をあわせた息子たちは、すぐに相手を認めあって、穏やかにかつ親密に顔を見かわし、こちらの耳には聞えぬほどの声で挨拶をした。僕にも当の少年がムーサンであることはわかり、その脇に立っている、絹のワンピースに尻までたれさがるようになかざりべルトの女性が、倉木まり恵さんだということも見当がついた。彼女の風貌そして動作に――ただ脇に立っているだけに見えても、障害を持った子供の母親は、たえまなく小さきぎみな躰の動きをしているものだ。人びとのたてこんでいる場所では、なおさらのことに――妻から聞いていたまり恵さんと同じかにつながる感じがあったのだ。

まり恵さんはこちらを正視するのではないままに微笑して、相手から無視されても一向に平気というふうだったが、実際その場では挨拶することもせず、人ごみの動きに押されて遠ざかった。母親が引いてくれる手に、まるつきり全身をたくして歩きながら、ムーサンは僕の息子の方へずつと頭を向けていた。息子の光とおなじく、ムーサンは複雑なプリズムをいれたレンズでも充分には矯正できない、厄介な眼の持主であるはずだった……

音楽会の会場は、市ヶ谷の高台にあるカテドラルだった。一般の演奏会場とちがって詰めた座席の、前方左端の通路脇に場所をとり、コートを置いて、僕と息子は折しも降り出した小雨の戸外へ出て行った。少し歩かなければならず、途中で真暗なところもある便所へ往復して戻って来ると、やはり小用をすませておいたらしいムーサンとまり恵さんとが、僕らのひとつ前の席に坐

つていた。演奏の間に尿意をこらえられなくなった場合、動作がギコチなく、身ぶりは周りに食み出しもする障害児の場合、会場端の、出入口に近い通路際に席をとるのが保護者の心得となる。ムーサンの肥って白い首すじによく似合う紺のジャケットの肩に、こまかな雨滴がついていた。僕の前にまっすぐ支えられたまり恵さんの頭は、薄い脂肪のついた頸のいくつかのほくろと、固めた蠟のような質感の耳たぶが、そこに眼をとどめることにうしろめたさを感じさせるほどの印象なのだった。

二部に分たれた『ヨハネ受難曲』の、永い演奏が区切りに近づく頃、光もムーサンもモジモジ躰を動かしていた。カテドラルであるため、会場規模に比べて小さい便所へ、小雨の暗いところを押しあいへしあいして通うには、それも障害のある子供を保護して行つて来るには、周りを肩の力で押し分ける男の強引さが必要である。そこで僕は休憩時間になるとすぐ、背後からムーサンに声をかけて便所へ誘った。まり恵さんは、ゆったりした衿まわりのワンピースの上躰をねじると――優雅で押さえた華やかさの身のこなしと闊達なほほえみは、ソプラノの声部を歌っていた女性歌手に匹敵した――、それまで一語もかわさなかつたのに、一家族の四人でそこへ来たのもあるかのように、自然にムーサンをうながしていた。光は養護学校の先輩として世話をやることに気負い立って、最前よりはるかに機敏にふるまい、ムーサンもいそいそと従うようであった。

この日のカテドラルの聴衆は、キリスト教関係のヴォランティア―経験者を中心とする集りの、

身障者や障害児への心づかいを示してくれる人びとであった。そのせいもあり効率よく便所へ往復して、僕はムーサンをまり恵さんにかえたのである。その時は快活に会釈しただけだったまり恵さんが、あらためて僕の読むプログラムの上を良い匂いのハンカチーフでかすめて、臆するところなく、こちらの髪についている雨滴をぬぐってくれた。まずムーサンの頭をぬぐって、そしてということだったのだろう。つづいて光をぬぐってくれようとするまり恵さんから、僕は判のハンカチーフを受けとって、恐縮をあらわした。もっとも声に出して礼をいうということはないうちに演奏が始まり、ついで第二部が終ると、われわれはそくさと席を立ち、夜更しをするどと発作のおこりやすい子供らを、それぞれ自分の家に連れてかえった…… こういう具合にして、まり恵さんと僕とは知合いとなったのである。

まり恵さんと僕とが直接言葉らしい言葉をかわしたのは、それから一月ほどたったのことだった。僕が障害児の父親であり作家でもあるということと、養護学校の校長先生から依頼され、障害児教育の研究集会へ話をしに行った。妻に誘われて、それをまり恵さんが聴きに來たのだ。僕の家では、たまたま義母が上京していたので、子供たちの世話を頼むことができた。

まり恵さんの家庭の事情を、待ち合せの場所からタクシーに同乗して聞いたところでは、彼女は離婚して、ふたりの子供のうち障害のあるムーサンを引きとり、名門の私立小学校に在学している弟、道夫くんは夫に渡した、ということだった。仕事を持っていながらムーサンを育てるのが可能なのは、勤務先の横浜の女子大学へ出かける間、彼女の母親がムーサンの面倒を見てくれ

るからだ。しかしそろそろ母親に老人性のボケが始ったようで、その点が気がかりだと、屈託ない笑顔ながら、濃い睫毛の下の翳った眼は憂わしげに、まり恵さんは話していた。妻は養護学校の母親仲間として、あらかた承知しているはずのことであり、まり恵さんはむしろ僕に向けた自己紹介として、話したのであったはずだが。

講演が終った後、集会の会場に選ばれた江東区立の会館の、もよりの駅のそばで僕らは喫茶店に入った。店の半分はパンやサンドウィッチを売る区劃で、こちらの区劃との仕切りは床の高低と植木鉢の列で示してある。そこで店内は、むきだしの場合でお茶を飲んでゐる、という感じのものだった。僕らは話をしたが、こちらは多人数の前で話したせいでバランスを失するほど外へ開いた感情を収縮させ、内に閉じた状態に戻す、そのような過程のことだった。つまりはしゃべりすぎたり、不連続的に黙りこんでしまったり、というふうだったろう。そうした話のとぎれめに、まり恵さんは、くっきりした脣の輪郭いっぱいには赤あかと口紅を塗っていたが、その口紅についてこんなことを話した。

——学生たちが、レトロの文房具でベティ・ブープを集めていて、私のことを「ベティさん」と呼んでるらしいのよ。その子たちはもとより、私も、ベティ・ブープの映画を見たことはないけれど……

まさにベティ・ブープ式の脣を、われながら照れくさがって、まり恵さんは自分から滑稽化する話しぶりをしたのだろう。そういえばと僕は、むしろ形の良い額のまわりのほつれ毛とか、翳